



2009 年度 環境学習支援士 養成プログラム

課題研究発表会 要旨集



2010 年 2 月 14 日 (日)

滋賀大学教育学部 中講義室

2009 年度 「環境学習支援士」養成プログラム

課題研究発表会

2010 年 2 月 14 日 (日)
滋賀大学教育学部 中講義室

プログラム

☞ 受付 9:00～ 9:30 中講義室前

☞ 開会 9:30 梅田 修 (企画運営委員長)

📖 研究発表

司会：安彦 一恵

9:40 「油日湿原」の保護と保全活動に関する研究
..... 片山 慈敏

9:55 自然のつながりをテーマとした中学生向け環境学習プログラムの
作成と実践 古家 智重子

10:10 里山に学ぶ 片島 史朗

10:25 滋賀県西ノ湖の自然と記憶に残る生活 丹波 喜徳

10:40 農業高校における GAP の導入について 福永 善吾

🕒 休憩 (10:55～11:10)

司会：堀越 昌子

11:10 「身近な水」を大切にするための授業実践 中村 匡子

11:25 水環境調査「みんなで知ろう！身近な川の水調べ」の
継続に関する研究 安部 尚子

11:40 小学校における学校ビオトープを活用した授業の実践
..... 奥田 真弓

11:55 地雷問題を通して国際平和への関心を高める学習構想と実践
..... 植松 智子

☞ 閉会 12:10 梅田 修

「油日湿原」の保護と保全活動に関する研究

片山 慈敏 (社会人コース)

1. はじめに

「油日湿原」は、湧水が浸出しているため、山間の緩斜面に位置しながら、植林は行えず、生産性の低い、使い道のない困りものであった。周縁に林道は開設されていたが、人手も殆ど入らなかったことから、昔ながらの高度な自然がそのまま残されており、生物多様性が重要視される今日になって、希少な野生動植物の豊富な湿原として見直されるようになってきた。

本研究では、「油日湿原」との遭遇を契機に地権者との交渉を経て、保護・保全活動の立ち上げから「油日サギスグ等生息・生育地保護区」に指定されるまでの経緯を整理し、湿原と周縁の管理作業の効果、湿原の現状とそこに生息する動植物についての調査研究を実施したので、その結果を報告する。具体的には以下の3点について明らかにすることを目的とした。

- 1) 多様な希少野生動植物の生息・生育地である「油日湿原」の環境を将来にわたって保護・保全するために、湿原の現状調査を行い、基礎的な資料を得る。
- 2) 地元の人を含めた保護・保全活動グループを立ち上げ、共同作業による具体的な管理手法を見出す。動植物の調査については誰もができる簡便な方法確立する。
- 3) 生態系や湿原の重要性について学ぶ身近な環境学習のフィールドとして活用できる仕組みについて考察し提案する。

2. 研究の方法

保護・保全活動を始めるに当たり、入山を管理し、踏圧と盗掘を回避することが不可欠と判断した。そのため、林道と湿原の整備として、林道のゲート、湿原前の掲示板と周縁にロープ柵を設置し、湿原には一ヶ所限定の出入口、観察路と木道を開設し、その効果を観察した。

湿原の縮小化と乾燥化を抑制するために、必要最低限の作業として、下草刈りと高木の除伐、水溜りの水位の調整を試行し、植生への影響を観察し、記録した。

湿原の水環境を調査し、水の流下方向や流量の管理方法を検討した。植生の観察は木道と観察路上からのルートセンサス調査により行い、植物と土壤水分との関わり、湿原特有の13種の保護対象植物については、それぞれの花期や生育場所について調査した。

3. 結果と考察

湿原までの林道の整備作業により、入山者の管理ができ、踏圧と盗掘を防止することができた。下草刈りと高木の除伐、水溜りの水位の調整の結果、これまで目立たなかった希少な植物が増加し、半乾燥地周縁の湿潤範囲も広がり、乾燥化を抑制できる感触が得られた。今後の作業の方向性と将来予測の一つの判断材料となった。

湿原の水環境を調査した結果、湿原発達の条件である集水域が狭く、湧水であることに加え、水質は貧栄養で、流路も機能的であり、湿原の存続には良好な水環境であることがわかった。

13種の保護対象植物種を中心に調査した結果、花期や生育場所を特定し、湿原の現況と植生の一端を明らかにすることができた。また、調査の際に有識者が同行すれば、関心も興味も高くなり、作業や環境学習も飛躍的に進むことを実感した。今回得られた基礎データは、今後の作業と調査に活用できるものとする。

4. 今後の保護・保全体制と活動

「油日湿原」の保護・保全活動は、自然の復元力を活かし、なるべく手を加えない方法で実施していくことを原則とする。地権者や一般の人々を巻き込み楽しみながら、保護・保全活動ができる仕組みをつくり、みんなの「油日湿原」、「環境学習のフィールド」として公開していく方向が望ましい。その上で、豊かな生態系を維持し、人と自然とが持続的なかわりを持てる管理体制を整備・構築していくことが必要であるとする。

自然のつながりをテーマとした中学生向け環境学習プログラムの作成と実践

古家 智重子（社会人コース）

1. はじめに

環境問題は多種多様でその解決には時間とコストがかかり、それでも完全に解決することは難しい。遠回りかもしれないが学校・地域・家庭が連携して、自然や命を大切にする子どもを育てるという共通認識を持ち活動していくことが大切である。本課題研究では、活動範囲が広がり情報量も増え学校や社会生活に大きな変化がある中学生を対象に、自然環境との関わりに気づく目を育む環境学習プログラムの作成と実践に取り組んだ。

2. 環境学習プログラムの作成と実践

本プログラムのねらいを「①自然のつながりに気づく眼を育む」と「②身近な自然の大切さを感じる」の2点とし、福井県の中学1年生を対象に実践した。プログラムの内容は「生き物の気持ち」発見隊と称する班単位で行う学習活動である。1つの班の人数は、6～7人とした。前半は自然観察を中心とした屋外活動で、後半は見たもの感じたことを班みんなで考えてひとつの「生き物の気持ちの」詩としてまとめる室内活動である。生徒は「生き物の気持ち」発見隊活動指示書（活動指示書・記録ノート・地図の3枚1組）と「生き物の気持ち」の詩のつくり方に従って活動していくこととした。実践日は2009年6月5日（金）で、場所は福井県立三方青年の家である。対象生徒は3学級78人で午前のAグループ（38人）と、午後のBグループ（40人）の2グループに分け同じ内容のプログラムを行った。各グループは、6班ずつに分かれて活動した。

3. 実践の結果と考察

プログラム実践直後の質問紙調査では、「問6. 活動課題は難しかった」以外はA・Bグループにほとんど違いがなく、大多数の生徒（90%以上）が肯定的な回答であった。この問6は「そう思う」と「どちらかといえば思う」を合わせた割合がAグループの5割強に対してBグループでは3割強である。この2割の差は午前の室内実験の授業に比べ、午後の「生き物の気持ち」発見隊活動の方を易しかったと感じた生徒が多かったとも考えられる。問8でAグループの「知らなかったことを学べた」生徒は、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた割合が100%であり、問6との関連からも活動課題は難しかったとした生徒の方がよく学んだのかもしれない。また、記述式設問の「発見隊の活動で学んだこと」では、「自然のつながり」関連の記述は32%ほどと予想外に少なかった。自然のつながりや関わりについての理解不足や観察時間の不足が考えられる。

4. おわりに

多くの生徒は、環境学習を難しく特別な授業と捉えているようなので、身近なものや自然のものを工夫したプログラムがよいと思った。また、プログラムは簡単で分かりやすいものが良いとは限らないので対象年齢を十分把握し、少し難度があり考えを深める要素と楽しいことやチャレンジできる要素の入ったプログラム作りを心がけて、子どもたちの環境学習を支援していきたい。

里山に学ぶ

片島 史朗（社会人コース）

1. はじめに

「里山」という言葉は江戸時代からすでに使われておりその後、色々な意味で用いられてきたが、今では広義の概念として「里山林、ため池、用水路、田んぼと畦がセットになった」生態系と考えるのが妥当と思われる。その里山の多くが高齢化と燃料・肥料革命、農業政策の変化などにより放置され荒廃し日本の生物の多様性すら損なわれようとしています。栗東市内の放置された里山の再生に取り組んで3年になりますが今回は、里山整備に伴い生物相の変化、金勝小学校の“山の子学習”のお手伝いで感じたこと、里山再生に取り組む仲間たちの想いや意見などを通じて学び、体感したことを報告します。

2. 里山の環境整備とそれに伴う生物相の変化

先ず環境整備として危険度合いの高い倒木や枯れ木の整理、道づくり、ため池の木道づくり、ビオトープづくりから始めた。それと平行して植生調査も行い、今後どのように生き物の様子が変わっていくのか観察していくことにした。3年間の整備により森に陽光が差し込み始め、雑草を刈り取った土手にはササユリやショウジョウバカマの花が咲き本来の里山らしさを取り戻しつつあることが実感できた。

3. 金勝小学校の“山の子学習”サポートで感じたこと

県下の各小学校では4年生を対象に「総合的な学習時間」を利用して「山の子学習」を実施しているが、我々の里山では金勝小学校4年生が自然薯栽培を行い1年間に亘り植物の成長や自然観察を行った。また実った自然薯を使ってお好み焼きづくりや交流会などを行った。これを支援し子供たちが自然に触れ植物を育てる喜びを感じてもらっていることは我々にとっても大きな喜びであり又、励みにもなっている。

4. 里山再生に携わる仲間の想い・意見

主宰者の呼びかけと“ゆっくり、楽しみながら、皆が主役で”の主旨に賛同して入会してきた仲間は自然との触れ合いを求めており、荒れた里山の再生意欲が強い。そこは癒しの場所であり仲間と共通の話題を持ち生き活きと活動できる場所でもある。しかしながらボランティアであるので自由が理想的であるが、それでは締りが無い。かといって組織として形をつくるのは窮屈であると複雑な心情を吐露している。一方、小学生の環境学習の場であり何かお役に立っていることには満足しており、今後ともさらに活動を充実しつつ外に向かっての情報発信も視野に入れだした。

5. おわりに

我々が取り組んでいる里山再生は小さなものであるが更に継続、充実させその果実（精神的な潤いも含め）を体感しつつ他の里山仲間や市町村へと情報を発信していきたい。里山保全の大切さとその価値の認識をいかに多くの人達に知ってもらおうか、これからの課題と考えています。

滋賀県西ノ湖の自然と記憶に残る生活

～ 沿岸 8 村落に関する調査研究 ～

丹波 喜徳（社会人コース）

研究の背景と目的

現在、滋賀県の琵琶湖岸における最大の内湖は、近江八幡市と安土町に位置する西ノ湖である。昭和 17 年に小中ノ湖、昭和 22 年に大中ノ湖の干拓事業が始まり、小中ノ湖が昭和 22 年、大中ノ湖が昭和 44 年に完成、津田内湖では昭和 46 年に干拓が完了し、周囲の景観は一変した。この近江八幡市の北部に位置する島学区は、古く平安時代より「奥島荘」「大島郷」の名が残り、昭和 29 年に近江八幡市となって以後も島学区として旧島村の「名」を伝える地域である。本学区を構成する 8 つの村落では干拓事業によって内湖そのものがなくなり、当時の水辺の様子を伝える資料や写真も少なく、高齢化が進む現在、このままではかつての内湖周辺の暮らしについて知る事は益々困難になると予想される。本研究の目的は 8 村落（島学区）の生活と内湖の姿、伝承されていることを調査し、資料として残すことである。当地域に関する先行研究・調査ではその対象がかぎられており、地元記憶を十分に伝えるものとはいいがたい。そこで本研究では地元での聞き取りをはじめさまざまな素材を用いて、内湖沿岸村落で繰り広げられたかつての生活や信仰を詳細に明らかにする。

本研究の構成は、西ノ湖の自然とその現状、8 村落における複合生業、島の信仰と宗像神社に大別される。発表会では 8 村落における複合生業、特に円山地区のヨシ業と漁撈を取り上げる。円山地区はヨシの産地である。地主（葦問屋）は数人で土地を所有していてヨシ地を持たない者は刈り子（葦を刈る人）として地主のヨシを刈りに出かける。ヨシ刈りは今も手鎌で刈り取りが行われ切株が鋭く尖る為に昔は手づくりの下駄を履いてヨシ刈りが行われた。刈り子のヨシ刈り賃は歩合制であり、西川嘉右衛門歳時記によると大正 5 年葦屋同業組合によって 3 尺 5 寸、 \sphericalangle 1 束を金 1 銭 5 厘と協定すると記述されている。（今も 1 束は 3 尺 5 寸と商売の単位として守られている）。ヨシ産業は地主、刈り子、製造販売業者とわかれ古くから分業化された産業である。漁業はカラス貝漁、フナ、コイをタツベ、モンドリ漁具等で、ヨシ巻漁、漬柴漁も行われた。円山の人々はヨシとの関わりが深く其の年のヨシのでき不出来に関心をもっていたのである。

まとめ

近江八幡・安土に位置する内湖は、古里の景観を守り、そこに住む生き物をいつくしみ、琵琶湖のみずをも守る。内湖と密接に関わってきた 8 村落では、水とみどり豊かな自然を上手く融合させた伝統ある暮らしが根付いており、祖先が残した知恵や工夫が多く息づいている。急激に生活が近代化し我々を取り巻く環境も大きく変わった現在、本研究によって先人の残した豊かな遺産を記録し、次世代に伝える資料として少しでも残す手立てが執れたことが幸いである。

農業高校におけるGAPの導入について

福永 善吾（長浜農業高等学校）

1. はじめに

農業高校では学習教材に農場が積極的に利用され生きた教科書として活用されています。今後もこのような流れは変わらぬと考えますが、「コンクリートから人へと！」という政治の大きな流れがあり、経済の閉塞感や、社会の大きな変化は、従来型の教科書中心の農場運営から社会のあるべき姿の中で、その変化を捉えた未来型農場運営へと、学習価値の見直しの時期にきていると考えます。そこで平成13年度から「環境」というテーマを取り入れた農場づくりが「滋賀県環境こだわり農産物」認証制度にのっとり長浜農業高校の水田で始まり今日に至っています。現在では、1学年の農業基礎・果樹園のハウスブドウで実施され少しずつ教員同士の勉強会により、広がりを見せ、面積は農場全体の35%を対象とし一定程度の成果を上げています。

しかし、類型学習間の学習目標の違いが「環境」というテーマで、長浜農業高校全体の教育農場として集約されるには遠いものがあります。

そこで、類型学習間の共通項目である生産物（学習成果）の方からアプローチを考え、未来型教育農場の実現を図るべく、昨今農業を取り巻く状況の中でクローズアップされているのが安全安心な農産物の生産流通過程を認証する適正農業規範GAP（Good Agricultural Practice）である。

今回、環境教育農場の確立に向けて、その導入の是非について考えてみました。

2. 実践課程の中で

GAPが農場・地域社会の安全・安心・景観とびわ湖をも含む環境保全を強く意識し、行動規範として導入を計画、実践の段階へと進む中で、学習農場は「環境こだわり農産物の認証」の技術要件を基礎に、さらにきめ細かな技術課題を克服しなければなりません。その取り組む過程の中に環境と生産技術・経営の学習が含まれており、まさにGAP理念のもと、こうした行動は「最低限の農場運営のマナー」ととらえてこそ環境学習型のフィールドが創造されるものと考えます。

そのため、農業教育に携わるものの理念の共有と実践の積み上げが要求されているものと思いません。

「身近な水」を大切にするための授業実践

中村 匡子（滋賀大学大学院）

1. はじめに

前年度に修士論文「小学校における『身近な水の大切さ』を主題とした環境教育のための教材開発」で取り組んだ内容をもとに、児童が身のまわりの環境について考えたり実践したりしていくための原動力になるような授業の構築について研究を続けている。本研究では、人間や生き物が生きていくのに不可欠な「水」に、児童がじっくりと向き合う必要性を感じ、「身近な水」を大切にするための授業を再計画し、実践した。計画の作成に際し、以前から活用している資料や写真を見直し、学習展開を工夫した。

2. 授業実践

2-1 学習設定

第4学年の社会科「くらしと水」の発展として総合的な学習の時間で実践した。全1時間を計画し、「身近な水」の存在に関心を持ち、びわ湖の存在価値について考え、自分の水の使い方やくらしぶりをふりかえることを学習のめあてとする授業実践を行った。



2-2 教材開発・工夫

○淡水の大切さ：「淡水」の必要性を児童に考えさせるために淡水と人工海水の飲み比べをし、「淡水」の総量を意識させるため掲示図を活用した。

○富栄養化のしくみ：フラッシュカードや写真を用いた。自分たちの水の使い方をふりかえらせ、今後できそうなことを考えるための材料とした。

○天然の水がめーびわ湖：びわ湖の水は天然水であるという認識を持たせ、湖上から撮った取水口（浄水場）や排水口（下水道浄化センター）の写真を用いて、びわ湖の水の恩恵について考えさせた。びわ湖は淀川流域の貴重な水源であることを意識させ、水源（周辺の森林）についても目を向けさせるため上空から撮影された流域地図（Google MAP）を用いた。



3. 成果と課題

授業後に、児童が「身近な水」への関心を高め、その「大切さ」に気づいた様子がみられたことから、本授業の効果があったと評価している。児童の学習記録や発表をみると、社会科で学習した内容と自分たちのくらしの実際とをつないで考えることができたようだ。平成23年度以降も第4学年で生活と水との関わりを取り扱う予定であり、自分のくらしと水との関わりを考えさせる機会になるこのような学習を「環境教育」として継続させていきたい。都市計画等の影響を受け、児童だけでなく大人も学区を流れる河川やびわ湖に立ち入ることが難しくなっているが、児童が実際に「身近な水」に触れることができるような教材開発も含めて、今後も「身近な水の大切さ」を考えていける環境教育の教材開発を進めていきたい。

水環境調査「みんなで知ろう！身近な川の水調べ」の継続に関する研究

安部 尚子（社会人コース）

1. はじめに

「みんなで知ろう！身近な川の水調べ」は、滋賀大学教育学部自然環境教育施設において滋賀大学環境学習支援プロジェクト主催で2007年から行なわれている事業である。この事業は、滋賀大学教育学部附属環境教育湖沼実習センターが行なっていた参加型事業「みんなでつくり水環境マップ」を継ぐ形で小・中学生対象に行われている。小・中学生のグループが水の分析方法を知り、実験装置や器具を使って、滋賀県内の河川の水質を調べるプログラムである。事前に準備した調査用紙とテキストを参照して河川の水質を知るだけでなく、まわりの環境や川の中の様子にも意識できるように工夫されている。さらに、各グループが普段から調査・研究している内容を発表したり、他のグループの発表を聞いたりして、互いに啓発しあうことも目的である。本研究では、この事業がより充実し継続するように、内容を検討することを目的に取り組んだ。

2. 方法

事業日を、例年、夏休みの中の土曜日に設定している。本年度は、8月22日に行なった。県内のエコクラブをはじめ小・中学生のグループで水環境に関して活動を行っているグループに呼びかけ参加グループを募集した。事前に、参加を希望したグループに川の調査テキストと調査用紙を送付し、当日、採取した水とともに持ってきてもらう。参加グループは、午前中に、採取した試水の電気伝導度、透視度を測定し、試水のろ過を行なう。午後には、各グループが活動や調査の発表を行い、交流を行う。

3. 参加者募集方法と参加者

チラシを作成し環境学習支援センターを通じて県内のエコクラブに配布してもらった。また、環境学習支援センターのメルマガに掲載や大津市環境政策部が事業開発されている「OTSUこども環境人」のホームページに掲載してもらうなどインターネットを介して募集を行なった。2009年度は6グループ39名（内11名は引率者）の参加者があった。

4. テキスト作成

事前に調査を行いやすいようにテキストを作成した。また、採水の仕方については作成されていたテキストを子どもにもわかりやすいように写真入りのものに改訂した。

5. プログラム内容

参加グループは、調査をしたい河川で採水および調査を行い、調査用紙に記入して滋賀大学自然環境教育施設に持ち込む。受付を済ませたグループから順に、実験、観察を行う。各担当、各実験、観察などの指導、施設内見学時の酸性雨の話、水生昆虫の同定および観察は、環境学習支援プロジェクトのメンバーである川嶋研究室のゼミ生の支援を得た。

6. 結果と課題

2009年度の「みんなで知ろう！身近な川の水調べ」は、多くの参加者を得て無事終了した。分析結果をどのようにわかりやすく伝えていくかが今後の課題である。また、「ふりかえり」の中で引率指導者の中から実験結果の解説と測定できる項目を増やしてほしいという点が挙げられた。この2点を今後の継続の為の研究課題としていきたい。また、参加児童や引率指導者から「来年も参加したい」「継続して欲しい」と希望が「ふりかえり」の中で書かれていた。これらの言葉を励みに滋賀の水環境を理解し、親しみが持てる子どもたちが多く育つ事を目標にこの事業の継続を願っている。

小学校における学校ビオトープを活用した授業の実践

奥田 真弓（環境教育専修2回生）

1. はじめに

「ビオトープ」とは、野生生物の生息する空間という意味の言葉である。多様な自然の残る滋賀県においても、野生生物の保護のために、生息空間となるビオトープを守ろうとする動きがある。本研究では特に、学校やその付近に整備された「学校ビオトープ」を取り上げた。子どもたちの自然体験活動が減少している近年において、学校ビオトープは子どもたちの最も身近な自然体験の場であり、活用が望まれている。一方で、長期にわたって維持していくことが難しいといった課題もある。そこで、学校ビオトープ整備後の活用を図るという観点において、授業を作成し実践することを研究の目的とした。

2. 研究方法

本研究は、草津市立渋川小学校の協力を得て行った。渋川小学校には、「渋川のビオトープ」と呼ばれる学校ビオトープがある。面積は約 220 m²で、池、水路、草原、樹木などで構成されている。2009年4月11日から11月21日にかけて、ほぼ週1回のペースで観察を行ったところ、節足動物が11目46科68種、その他魚類などが9種、植物28科50種の生息が確認でき、季節変化の様子や食物連鎖の瞬間も見ることができた。

第6学年理科「生物とかんきょう」の単元において、学校ビオトープを活用した授業開発を行った。本単元は第1次「生物と養分」、第2次「生物と水」、第3次「生物と空気」からなっており、生物が他の生物や周りの環境とかかわりあって生きていることを学習する。特に、第1次「生物と養分」の中で、「生物どうしのつながり（食物連鎖）」の学習を、学校ビオトープをフィールドとして授業を作成した。2009年7月2日の1・2校時に実践した。

3. 実践結果と考察

授業は、班活動で学校ビオトープ内における生物の「食べる・食べられる」の関係を予想した後、ビオトープに入って生き物さがしや観察を行い、その結果を踏まえて生物の関係を図にまとめ、その図についてクラス全体で発表し合うという流れで進めた。授業計画を立てた際には、①児童がビオトープ内で生き物さがしや観察をする活動を取り入れること、②地域住民にも授業に参加してもらい、グループで観察を行うこと、③教材として「生き物カード」を作成し活用すること、という3点の工夫を行った。授業中に数十分の観察時間を設けたが、児童がメダカやショウリョウバッタ、イトトンボなどの生き物を発見することができた。クモの捕食場面も見ることができた。「楽しかった」という感想が多く、意欲的に取り組む児童の姿も見られたことから、学校ビオトープでの観察は有効な活動であったと思われる。

授業では、食物連鎖という用語を使わず、「生き物がビオトープ内に存在する＝生き物の命のつながりがある」という考え方を提示した。児童の感想の中に「命のつながり」について触れているものが多く、食物連鎖の必要性を学ぶことができたと評価している。さらに、自分たちの考えた生物の関係を、再度観察をしたり資料等で調べたりして確認する時間が取ればよかったと思う。また、「他のビオトープでも調べたい」といった、児童の新たな疑問に応える授業の展開も考えられる。

授業に参加した児童と大人の両者から、「予想以上に、たくさんの生き物がいた。」という感想が挙げられた。本授業を通して、児童は生き物とふれ合うよい機会が得られ、ビオトープの魅力を再認識することができたと思われる。さらに、多くの児童・教員・地域住民にもビオトープの良さについて知ってもらい、ビオトープが長く活用され続けることを期待している。

地雷問題を通して国際平和への関心を高める学習構想と実践

植松 智子（環境教育課程 4 回生）

【研究目的】

大学 2 回生から地雷除去現場を視察したことがきっかけで地雷問題に対して強い関心を持ち、大学構内やカフェにて地雷展を開催し地雷問題の啓発活動を重ねた。そこで伝え・知らせることで多くの人が心を動かしていく姿を見て、情報を共有することの重要性を実感した。その知識と経験を用い、地雷問題の学習を通して遠い国の問題を他人事として捉えるのではなく、身近な問題として関心を持てる学習構想を作成し、実践をしてその有効性について考察を加える。

【地雷問題とは】

地雷とは、地中や地表に置かれ、人や車両が近づいたり接触したりすることにより爆発する兵器であり、特に対人地雷は紛争終結後の地域で民間人に多くの被害をもたらし、戦後の復興・開発の妨げとなっている。過去 10 年で地雷の被害国は世界の 119 カ国に上り、地雷問題は地球規模で解決しなければならない大きな課題の 1 つといえる。地雷が敷設してあることで民間人の居住・食生活環境も特定の集団も破壊されていく意味では、環境への影響も大きい。

【学習構想と実践】

学習者が他国の実状や問題を理解・共感し、自身との関係を学習することで、問題意識を持って自ら国際平和に主体的に貢献しようという姿勢を育てる学習構想を作成した。

時	今津中学校	主な学習内容	時	唐崎中学校	主な学習内容
1		<ul style="list-style-type: none">地雷の種類、目的、3つの特徴について知る。世界の被害状況、被害者の実態を知る。地雷除去の方法と大変さを理解する。	1		<ul style="list-style-type: none">「地雷問題について知ろう！」地雷の種類、目的、3つの特徴について知る。世界の被害状況、日本との関連を知る。地雷被害者の気持ちを考える。
			2		<ul style="list-style-type: none">「世界は地雷問題に向き合っている！」地雷の除去方法を考える。除去に膨大な時間と労力が必要だと気づく。日本の援助の大きな役割について知る。
			3		<ul style="list-style-type: none">「自分たちにできることは何か考えよう！」自分たちにできることを具体的に計画し、ポスターにまとめる。

試行授業実践は今津中学校 2 年生全員と唐崎中学校 2 年生選択社会、3 年生選択理科・社会を対象として、今津中学校は 1 時間構成、唐崎中学校は 3 時間構成で授業を行った。パワーポイント、地雷除去の映像、スライドショームービーを活用して理解しやすく心に残りやすいものにし、また生徒の意見を上手く肯定していくことで、積極的に参加できる授業を展開した。

【考察と展望】

地雷の恐ろしさに強い印象を受けた生徒たちは、学習を進めていくうちに無関心だった地雷問題への関心が高まり、「何か自分でできることをしたい」「周囲に知らせたい」という姿勢が形成されていた。さらに「世界に対して社会貢献をしたい」という意見も多く、「地雷問題を通して国際平和への関心を高める」という本研究の大目標は達成できた。また試行実践を通して環境、平和、人権の問題についての教材に関する教育現場のニーズは高いことがわかり、この学習構想は生きた平和教育として現場教諭から高い評価を得られた。今後はこの学習構想が多くの学校現場や市民の間でも活用され、子どもから大人まで国際平和への関心が高まることを期待する。



**滋賀大学 「環境学習支援士」養成プログラム
企画運営委員会**

〒520-0862 大津市平津 2-5-1

滋賀大学教育学部企画係

電話：077-537-7701

kikaku@edu.shiga-u.ac.jp